

勝林寺寺報

宣説大乘無上法 証歡喜地生安樂

顯示難行陸路苦 信樂易行水道楽

戦後の日本の社会はいろいろな方面で急激に変化してきました。家族というもののあり方も、「核家族化」が進んでいるといわれた時代は久しく、その核家族も核分裂して個人のみになり重きがおかれる時代となつていようです。車も一家に一台の時代から一人に一台に、部屋も一人一人の個室にそれぞれの「TV」コンピュータもパソコンになりました。家の中でも、電車の中でも、歩いていても、喫茶店でお茶を飲んでいる恋人たちも、一人ひとりがスマートフォンを見ています。

平和で豊かな一人一人が尊重される素晴らしい社会を日本人は創りあげてきました。しかし、私たちの人生は大海原を行く船に例えられます。永い船旅も、最初は小さな入り江の港から始まり、入り江の港は波穏やかな暖かい場所です。そこでは小さな舟が行きかい、のんびりと釣りをする人もあれば、浜辺で昼寝しながら日光浴もできます。ヨットにのったり、手漕ぎボートで遊んだり、一人一人が自由気ままに舵をとりながら時間が過ぎていきます。モーターボートやジェットスキーは爽快で、いつまでもそのスピード感に酔って遊んでいたい気持ちになります。今の日本の穏やかさは、この入り江の港のようです。

しかし、私たちの人生は、生死の苦海、大海原の航海です。入り江から外洋に出て、遠い岸まで向かわなければなりません。ひとたび港を出ればその外海は山のように波が高く、防波堤から出た瞬間に荒々しく小舟を飲み込みます。大海原の航海は大きな船に乗り込まなければなりません。大きな船は乗ろうと思えば何人でも乗れる大きな船です。私たちは入り江の沖に停泊している大きな船までしっかりとボートで漕いで行き、人生の大きな海を大船に乗って渡っていくのです。決して入り江の穏やかさに心を奪われ、大きな船の出航に間に合わなくならないよう、心の準備をしなければなりません。

お釈迦様がお亡くなりになって100年ほどたった頃、仏教には大きな分かれ目ができたといわれます。「大乘仏教」と「小乗仏教」です。この大きな乗り物の仏道をひろめていただいたのが七高僧の第一祖龍樹菩薩さまでした。そして親鸞聖人は私たちのお念仏こそが大乘の至極だと示されているのです。

私たちの社会も今分岐点に立ち、大きく変わろうとしています。現実社会の中で、何がどう変化するのか、未来は簡単には見えてきませんが、念仏に生きるものとして、大乘の精神をあらゆる実践に生かし、現実の社会の変化に対応していきたいものです。

葬儀

一月七日	正法寺	森友	文子様	五十一歳
一月一二日	上小田	谷垣	ます様	一〇〇歳
一月二〇日	東里	長谷川	政次様	九十一歳

ご報告

一月十九日に開催されました代議員会で、二〇一九年の勝林寺行事が承認されましたので、ご報告いたします。なお、詳細につきましては、各月の寺報でお知らせします。

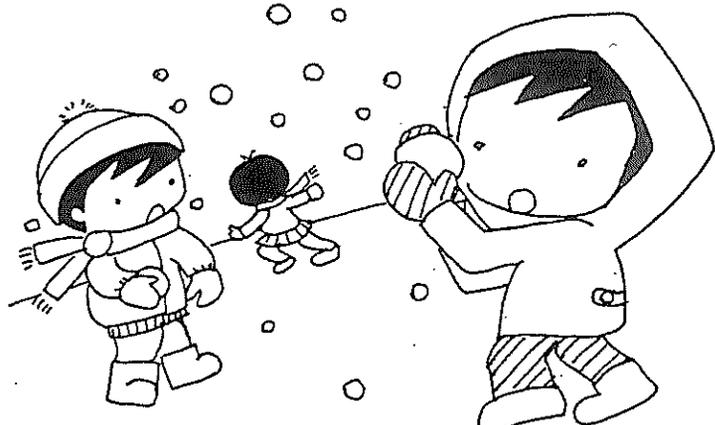
- 二月 二日 仏壯総会
 - 三月 十一日 仏婦評議員会
 - 三月 二十一日 春彼岸会・合同役員会
 - 四月 六日 組会
 - 四月 十三日 観桜会・グランドゴルフ大会
 - 五月 五日 花まつり
 - 五月 十八日 降誕会
 - 五月 二十七日～二十八日 出石組念仏奉仕団
 - 六月 九日 出石組仏婦総会（光頭寺）
 - 六月 十五日～十六日 納骨研修旅行
 - 六月 二十九日 おみがき奉仕
 - 七月 八日～九日 永代経
 - 七月 二十日 寺族同朋講座
 - 八月 八日 全戦没者追悼法要
 - 八月 十九日 仏婦・子ども研修会
 - 九月 二十三日 秋彼岸会・合同役員会
 - 十月 六日 前任職三回忌法要
 - 十月 十九日 敬老報恩講
 - 十一月 十六日 おみがき奉仕
 - 十一月 二十一日～二十二日 報恩講
 - 十二月 一日 合同役員会
 - 十二月 二十七日 餅つき
 - 十二月 三十一日 除夜会
- *毎月二十六日午後七時半より 「みのりを聞く会」



二月 勝林寺 予定

- 一日(金) 兵庫教区 臨時教区常備会
- 二日(土) 勝林寺 仏壯総会
- 三日(日) 田中重雄宅 忌明法要
- 一日(月) 勝林寺 仏婦評議員会
- 二三日(土) 谷垣久司宅 忌明法要
- 二四日(日) 森友 強宅 忌明法要
- 二六日(火) みのりを聞く会

(敬称略)



癒しと救い

現代人の心

現代の多くの人々は、それぞれが心の底に、何らかのストレス（緊張）を抱いて生きているのではありませんか。テレビや新聞で報じられる家庭内事件、また社会の片隅で起きる痛ましい殺傷事件の多くは、そういう心のイライラがこうじ、それが何かを原因として、暴発することによって生まれたもののように思われます。

心癒す
そこで私たちは、それぞれの日常生活において、心のイライラ、そのストレスを、賢明に解消する方法を持つことが大切です。それについては、気の合った友人とお酒を飲むのもいいでしょうし、また仲のいいグループで旅行を楽しむこともいいでしょう。思い切つて気分転換、心の癒しをはかることが何よりです。ところで、最近では、そういう心の悩みを解決するというテレビ番組が生まれて、なんとかカウンセリングとかいって、怪しげな男性が守護霊を持ってと言ったり、占いを専門とする女性が前世の因縁を語るなどして、世間の注目を集めておりますが、はたしてそれらが、ほんとうにストレス解消に役立つものかどうか。しよせん大衆受けを狙ったところのコマーシャル・営業用のテレビの映像として、うまく編集されたものにすぎないでしょう。たとえそういう方法によって効果があつたとしても、それはあくまでも一時的、部分的な解決でしかありません。

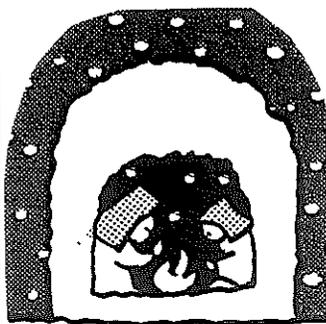
人格を育てる
それにくらべると、仏教が教えることも、またそういう心の悩みを解決する道ですが、仏教ではその悩みをたんなる心理的な問題として捉えることなく、人間の「いのち」、人格の問題として考えます。すなわち、仏教では、人生にさまざまな煩悶、苦悩が生まれてくるのは、わた

したちが人間として未熟であること、十分に成長していないことによるというわけで、私たちが日ごろ仏法を学び、仏壇を中心とする生活を続けていたら、「いのち」が育てられて、その人生において、いかなる苦難、障害にあうとも、よくそれを乗り越えていける、自立した人格が生まれてくるというのです。

仏教では、仏に救われることを済度(さいど)といいますが、その済とは、つくりの斉とは女性が髪を結った姿をあらわして、「ととのえる」ことを意味します。かくして済とは水をととのえる、水を「わたる」ことをあらわし、その度もまた尺の字に共通する字で、尺とは、手首の先を親指とあとの四本の指とをひろげた形を表し、昔はその長さを一尺と言ひ、その動作を繰り返して長さをはかつたわけですね。「しやくとりむし」(虱)の進み方がそうであるように、尺という字は、越えていく、わたつていく事を表しますが、度という字も、この尺に重なる字で、越えていく事で「わたる」ということを意味します。

かくして済度とは「わたる」ことで、人生のいかなる状況においても、つねに前向きに渡っていくことを意味します。仏教は、そういうよく乗り越え、渡つていく道を教えるわけですね。真宗で、死ぬことを「往生」というのは、新しい生命に生まれることで、死さえも前向きに渡つていける、ということをお教えたものにほかなりません。

(信楽峻庵遺稿法語集より引用)



法語カレンダー二月(「心に響く言葉」より) **まことというは**

信心をあらわす 御のりなり

二十五歳の時、アメリカにある本願寺ロサンゼルス別院に開教師として赴任させていただきました。海外のお寺で活躍したい。それが私の学生時代からの夢でした。夢にまで見たことが現実となるとき、本當ならよるこんでアメリカへ出発するはずだったんです。でも、骨を埋める覚悟で、永住するつもりで、旅立つ末っ子を見送る、あの父親が、黙つてうつむいた姿を目の当たりにした瞬間、私の心には、

「ああ、家族と離れ離れになるのは嫌だ。アメリカにはいきたくないよ」と、いままで感じたこともないような思いで、心がいつぱいになりました。これがすでに行つたことのあるアメリカ、隣の国に行くだけでこんな思いになる私です。

往つたこともないお浄土に参らせていただくとき、つまりこの世のいのちを終える時、「やつと往ける」と喜んでお浄土に参ることができるとしようか。きつと私は、後ろ髪を引かれる思いに苛まれることでしょう。

阿弥陀さまは、こんな私を「そんな気持ちになることは、とつくの昔からしつていたよ。心配いらない。そんなあなたをこそ、必ず救う」と誓われ、その誓いがいま私に届いていてくださいます。すでに私の本性を見抜いた上に、そんなあなたをこそ、必ず救うという阿弥陀さま。その阿弥陀さまのお救いの確かさを聞かせていただいたから、揺れ動くこの私の心に大きな安心をいただくのです。移ろいゆく、変わっていく私の心で安心するではありません。阿弥陀さまのお救いの確かさを聞かせていただいたから、本當の安心を得ることができたのです。

どすん

皆さんにお尋ねします。最近(ここ数年)、一番うれしかったことは何ですか?突然聞かれたら考え込んでしまいますよね。頭の中に、色々な場面が思い浮かんで、あれかなーこれかなー。思い浮かぶ人はいいいですね、何にも浮かばない方もいらっしゃるかもしれません。私は、すぐに答えられるんです。

「二年前、いただきものの化粧石鹸を最後まで使い切ったこと」。「はーあ?」「なんだそれ?」と思われたかな?「坊主さんって案外さみしい暮らしをしておられるんだな」と同情されたかな?いやいや、私だつて、旅行にも連れて行つてもらいましたし、美味しいものも食べました。誕生日や母の日には、プレゼントももらいました。みーんなどつても嬉しかったのですが、一番はやっぱ化粧石鹸(笑)知り合いの方からいただきました。特別な効能を聞いたわけではありません。それを使ったから、きれいな肌つたわけでもありません。ただ、一日一回、洗面所での朝の洗顔だけに使い続けました。始めたころは、使つても使つても減つていくことがほとんど実感できませんでした。ようやく、一か月くらいたつたころ「あーなんか少し減つたかも」と思え、同時に「私は、これを最後まで使い切れるかな」と自分を試してみたくになりました。元来大ざっぱな性格ですから、何に対してもこだわりがありません。「最後までやりきること」はおろか「最後まで使い切ること」さえできないことが常でした。そんな自分のまことに小さなチャレンジの始まりです。そして、使い始めて一年と約半年、六面四方厚さ三mmの石鹸が豆粒状となり、私の手の中で完全に泡になりました。「やったー!」「私にもできた!」それはそれはうれしい出来事でした。それからちよつと自分に自信ができました。(文責 坊主)